Japanese Association for Religious Studies



とされ、財団法人は文部大臣の認可制とされた。仏教教団が大学において自教団の僧侶を育成することが、国家の介入を受けることとなったのである。また、大正一二年、当時の龍谷大学教授・野々村直太郎が異安人として多くの批判を受けた事件（野々村事件）に代表されるように、大学の経営・運営はあくまで財団法人の管理下に置かれているのであって、仏教教団は法的には関与することはできなかった。当時の本願寺派の規則においては、僧籍剝奪の決定を受けると大学教員資格も喪失する旨が規定されていたが、それは大学自治の問題や思想信条の自由問題、ひいては政教分離問題に関わることであった。近代教育制度に則って設立された宗門系大学ではあるが、それは近代以前の僧侶育成機関とは性格を異にするものとしてみる必要がある。最後になるが、仏教教団が、自教団の僧侶をどのように育成しようとしたか、その変遷を通して近代日本の仏教をみてゆきたいと筆者は考えている。

## 祈禱寺院における信者獲得と固定化

阿部友紀

本発表では、曹洞宗の祈禱寺院である龍澤山善宝寺（山形県鶴岡市）における、信者の獲得と信仰の持続に関しての考察を企図するものである。善宝寺は伽藍の守護神である龍神が祈願対象であり、特に漁業・船舶・水産関係者に尊崇者が多いことで知られている。その信者は地域・職域ごとに講集団を結成し、年数回ほどの代参や集団参拝・祈禱会への参加を活動としている。このような地域・職域単位の講を束ねているのが「善宝寺龍王講」である。この龍王講は寺院の僧侶が運営の主体であり、各地の講との関係は僧侶→講代表者→一般講員というように縦断的である。各講の同質性（祈願内容・生活環境・職業）は比較的近似しているのだが、講相互の交流はほとんどなく、横断的な関係を形成していない。そのような状況に対して講相互の交流を意図して発刊し講員に配布されているのが『龍王講だより』（昭和四六年から年一回刊行）である。この機関紙は龍王講全体の現状を報告するとともに、注目すべきは講員の信仰体験つまり「霊験譚」を多く掲載していることである。つまり機関紙という配布メディアによって霊験譚を講員間に流通させ、ご利益＝霊験として具体的事例を共有化しているといえる。本発表ではその霊験譚の一部を紹介し、機関紙に掲載する意味、霊験譚を掲載することで生じる作用について考察した。

その結果明らかになったこととして、龍王講において流通している霊験譚には、クチコミのようなかたちで地域内・講集団内で語られていた霊験譚と配布メディアで語られる霊験譚の位相があり、これは元来各講において語られていた霊験譚が講を越えて他の講へと伝達され、日常的には非交流的な龍王講各講に信仰の実際（ご利益の実際）による同質的な連帯が緩やかな共同性として形成されている点である。

一方において、流通された霊験譚が単なる〝お話し＝方便〟でなく、現世利益を希求する龍神信仰について一定の共通理解



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



を形成する契機となしえる。その共通理解とは、龍神を信仰することは具体的なご利益が生じることであり、他方では自身に起きた霊験と同様なことが他の講員にも起きているということである。前者はいわば他人に起きた霊験がじぶんにも同様に起きるかも知れないという期待の拡大のことである。この期待は講員の同質性が担保しているといえる。同じ神仏を拝み同じ生活環境であるなら我が身の上にも霊験が起き得るかもという期待である。対して後者は自身に対して起きた霊験と流通された霊験譚を照応することで、自身の霊験の正当性、すなわち自身の龍神への信心の妥当性について再確認するいわばチェック機能を持っていると考えられる。

『善宝寺龍王講だより』というメディアにおいて「霊験」言説が流通・共有されることとは、具体的な霊験譚を通じて緩やかな共通言説の構築が行なわれていくことであり、それは個別的・非交流的な各龍王講を、実際的なご利益がもたらされる龍神信仰という言説の天蓋で覆っているといえる。その点が信者の獲得と固定化にも寄与しているといえるだろう。

# 、心會と教祖熊崎健翁

## ――教団本部における資料調査から――

下村育世

、心道（ちゅしんどう）（後の、心會）については、これまでまとまった調査研究がなされておらず、昭和初期に小さからぬ社会的インパクトを持っていたことは知られていても、現在では既に宗教活動をほぼ停止し、占い活動を主としている教団であることもあって、過去からの教団活動や組織形態、信者のあり方もわかっていない。このような中で共同研究者と筆者は、教団本部において資料調査を継続して行っている。ここでは教祖熊崎健翁（一八八一―一九六一）の思想や活動の展開過程について、これまでに辿りついた中間的結論を扱う。

熊崎は四十九歳まで新聞記者として活躍した後、昭和三年に運命鑑定所「五聖閣」を設立して転身し、昭和七年に、心道をうちたて、宗教家としての道を歩んだ。通常、「宗教」教団において運命学（占い）は、一定の役割を果たす場合でも信仰の道に入るための「方便」として捉えられ、重要な位置づけを与えられることは少ない。その意味で、運命学に出自をもち、とりわけ易の思想が教義上重要な位置を占め続けた、心道は、珍しい事例と言える。そして、熊崎が「宗教」への移行に際してどのような論理の展開をしたのか、内実にどのような変化を伴ったかは、、心道の特徴を捉えるにあたっても重要である。

とりわけ姓名学で知られる熊崎は、運命学の基本は易であるとして、、心道をうちたてるにあたっても易の思想に大きく依拠し、易の「太極」をあらわす「、」（ちゅ）を中心概念とした。運命学の活動から始まった熊崎の実践は、これを機に重心を「宗教」へと次第に移していくことになる。熊崎は理を知り安心立命するのが運命学で、理を知らずとも宇宙の玄妙さを信仰し安心立命するのが信仰とし、前者のもつ体系性や理解を尊



NII-Electronic Library Service